

【配点】 ①・②・③ 各2点×20 ④⑥・⑤④ 各6点×2 その他 各4点×12

1

1 農家
2 鉄
3 島
4 命令
5 真夜中

6 結ぶ
7 念入り
8 一辺
9 欠点
10 苦い

2

1 エ
2 ア
3 ウ
4 エ
5 エ

3

1 主語 イ 述語 ウ
2 主語 ア 述語 エ
3 主語 ウ 述語 エ

4 主語 ウ 述語 オ
5 主語 オ 述語 ク
③ 各完答

4

1 I お母さん II 心配
(1 完答)
2 A イ B ウ C ア
(2 完答)

3 赤ちゃん
4 戦いごっこ
5 イ

6 会える
7 思ったより
8 はやく
9 お母さん
(6 同意可)

7 イ

5

1 I 教本 II ずさん
(1 完答)

2 つくり話
3 ウ

4 話を引き伸ばすため、物語にフ
5 イ ク シ ヨ ン が 入 る こ と 。

5 イ
6 I ○ II ×

(4 同意可)

① (漢字の書き取り)

1 から10までの漢字は全て、ベーシックのトレーニングテキストにて出題されているものである。漢字は、正しい字形を覚えるために反復練習をするのはもちろんのこと、意味調べもして、漢字と意味とをセットで覚えていくことが大切である。また、正しく覚えるために、ふだんから一画一画でいねいに書くことも心がけよう。2の「鉄」の右側が「矢」にならないように、4の「命」の最後の二画を「おおざ」としないように、7の「念」の上半分を「令」としないように気をつけよう。

② (国語辞典のつかい方)

国語辞典は、見出し語が言い切りの形で五十音順にならんでいる。規則にそってならんでいるので、その規則をおさえておく。濁音や半濁音(「ば」や「ぱ」など)は清音(「は」など)といったんは同じ字としてあつかうこと、小さい「っ」なども「つ」などと同じ字としてあつかうこと、長音(「ー」)はひらがなにおきかえて考えることは知っておきたい。このように説明するとむずかしく感じるかもしれないが、実際に辞典を引くことで自然と慣れてくるので、ふだんからどんな辞典を引こう。

③ (述語と主語)

まずは文全体の述語をおさえる。述語には文をしめくくる働きがあるので、ふつうは文のいちばんうしろにある。述語が文の先頭やとちゅうにおかれることを「倒置」という。主語の位置はとくに決まっていらないが、述語に対しての「なにが」、「だれが」にあたることをさがせばよい。ただし、文によっては主語が省略されていることもあるので気をつけよう。

④

1 情景や天候などから、登場人物の気持ちを読み取れることがある。「なんだか暗い」という表現によって、ボクのマイナスの気持ちをそれとなく示していることはわかったであろう。「お母さんを捜した↓いない↓暗く感じた」という流れもおさえておきたい。

2 アは「お父さんをもう一度揺らして」とあるので、そのまえにも一度揺らしているはずである。本文の三行目に「お父さんの腕を揺すった」とあるので、アは(B)か(C)にはいる。イとウでは、「お父さんの布団にもぐり込む」布団を飛び出す」という流れになるので、「イ」↓「ウ」の順になる。(B)の直後でダンスから服を取り出しているので、(B)には「ウ」がはいらないとおかしい。話の流れを頭の中でしっかりイメージしながら考えよう。

3 本文のはじめのほうからは、お母さんがどうして入院したのかは読み取れない。実際にお母さんに会うまで、お母さんが病気かもしれないと思っているのである。本文の最後の場面に「赤ちゃんを抱いている」とあることから、出産のために入院したとわかるだろう。

4 かよちゃんと遊ぶことがボクにとってプラスなので、一緒に遊びたいのである。かよちゃんと遊ぶことに対するボクのプラスの気持ちとその気持ちになる理由が書かれている文をさがそう。

5 お母さんとちがって、「大好きなブルーベリージャムをたっぷりいっぱいぬってくれる」「牛乳ではなくジュースを出してくれる」「卵とプロッコーを出さない」お父さんに対して「好きだ」と思っているのである。

6 かよちゃんのおかげで母さんの所に行けることになったので「ありがとう」と思っているのである。ただ、お父さんが帰ってきたらお母さんの所に一緒に行くことになっていたことに注目したい。「夕方までは待てない、はやくお母さんに会いたい」というボクの願いをかなえてくれたのはかよちゃんママとかよちゃんなのである。

7 「お母さんが死んだらどうしようという心配↓お母さんは生きていたという安心」が嬉しさにつながったのである。悲しさの方は「お兄ちゃんになったことによつてどうして悲しくなったのか」と考えてみよう。

⑤ ※ 問題作成の都合上、一部表記を改めています。

1 線①は「綴り方教育」をいちはやくとりいれた乾先生のやり方であり、「これとは反対の作文教育のやりかた」とはそれ以前の教育のことである。その教育方法は「一前の段落で「教育的な作文の見本」をもとにした指導として書かれており、「好きなように作文を書かせる」方法とは対照的なやり方である。

2 傍線をふくむ一文を読むと、筆者自身が書く物語(＝作文)のことについての説明だとわかる。前後の部分でくり返し「作文をフィクションに……」「どうしてもそこにフィクションが……」「こうして……フィクションを書くように……」とある。ことばの意味を知らなくても、文脈から見当を付けられるようになっていきたい。

3 ③をふくむ一文で「そういう作文教育を受けたために……」とあるが、これはもちろん乾先生の作文教育のことである。文章をたどっていくと、直後に「いっしょうけんめい、一つの物語をつくりあげる努力をしたのです」とあり、その中で「うそ、フィクション」をまじえつつ物語を書き上げる姿勢が身についていったことが説明されていた。そして最終段落で「ばくは、乾先生からストーリーテリングの楽しさを学んだ……」とまとめていることに注目する。

4 指示語の指示内容は通読時にも気を配りたい。この場合は直前部分を指示するという基本的な流れである。「フィクションが入ること」を軸にして、指定字数に合うように答えを作っていこう。

5 傍線をふくむ一文を読むと「このうそは……悪かったと思っていません」とある。前段落で筆者が書いた「うそ」についてふれている選択肢を選ばばよい。筆者が先生に怒られた「うそ」とは、「疲れて寝込んでいるお母さんに無理を言って起きてもらい、つくろってもらった」という内容のものであった。

6 I 最終段落に書かれているので○。

II 文部省のせいで「マンガを描く人がいなかった」とは本文から読み取れないので×